



## 「平和への祈り」 戦争のない世界へ

福井県立高志高等学校 1年 中村 仁美

1枚の写真を前にして、私は言葉を失った。焼き尽くされた家々や木々に囲まれ、ただぼう然と立ち尽くす少女の姿が私の目の前にあった。少女の足下には、頭蓋骨が見えている女性の横たわる姿がある。ガイドさんの説明によると、その少女の母親だという。遠くを見つめる彼女はいったい何を考えていたのだろうか…。

私は家族旅行で長崎原爆資料館に来ていた。資料館には、爆風で飛ばされた石や黒焦げになった親子の写真、ねじ曲がった鉄骨などが数多く展示されていた。ここを訪れるまではグロテスクなものは見たくないという気持ちから、両親の勧めで原爆資料館に足を運ぶことを拒んできた。しかし、実際に展示品を見ているうちに、原爆の恐ろしさや被害の悲惨さなどを直接感じ取ることができた。そして何も私が知らないこともわかった。

8月9日午前11時2分。広島に続き長崎にも原爆が投下された。いつもと同じように生活していた長崎の人々の生活を一瞬のうちに奪った。驚いたことに、広島原爆のことは一般の人々には知らされていなかったそうだ。74000人も人が死に、75000人も人が負傷した。後々まで放射線による病に苦しむ人も多かった。特に私が気の毒に感じたのは、「ブラブラ病」で亡くなった人のことだ。外面的には異常がないが、放射線の影響により何の意欲もわかず、仕事は何もできない。周りからはただブラブラしている怠け者と非難され死んでいった。どれほど無念な思いであっただろうか。

もし今、原爆が私の住むところに投下されたらと考えるだけでゾットする。住んでいる町、大切な人、思い出の品々、人々の未来への希望、すべては一瞬で奪われてしまう。多くの人を苦しめ傷つけた過去の事実を忘れないことが、戦争を避ける第1歩だと私は思う。

戦争や命の大切さについて、私はそれ以来真剣に考えるようになった。調べてみると、現在地球上に存在する核兵器の数は17000発以上。そのうち2000発はすぐにも発射可能な状態にあるという。長崎や広島と同じような悲劇はすぐ身近にあるかもしれないのだ。

新聞記事に元兵士の言葉が載っていた。上官の命令で民家を焼き払ったり、食料を奪ったりしたという。仲間の日本兵は中国の敗残兵300人余りを全部殺したそうだ。人間として、やってはならない残虐な行為に関わったと元兵士は深く後悔していた。戦争は負けた人が苦しむだけでなく、勝った人にも深い傷を負わせるのだと私は思った。その元兵士は、98歳になっても家族に戦争体験を語り続けているという。

原爆資料館でガイドをしてくださった方は、戦後生まれで原爆体験者ではなく、教師を退職してから、原爆の恐ろしさを伝えるために資料館でボランティアで活動しておられるそうだ。その方は、原爆の恐怖だけでなく、福島で甲状腺の病のため苦しんでいる子どもたちがいるということや、核兵器で金もうけをしている人がいることを熱心に話してくださった。その姿に私は放射能への強い危機感と平和への深い思いを感じた。

私は将来教師になりたいと考えている。私が教師になる頃には戦争体験者はきわめて少なくなっているだろうと思う。語り伝える人が少なくなっても、戦争の悲惨さを私が後世に語り伝えていけるように、また子どもたちが戦争のない世界を目指すように、戦争と平和について私自身が学び続けていきたいと思う。

原爆資料館を去った後、私は平和公園を訪れ平和祈念像を見た。垂直に高く掲げた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を表しているという。平和祈念像に手を合わせながら、私はこう祈った。

世界が自由で平等で、誰も傷つかない、戦争のない世界になりますように…。